齋藤茂吉著

アララギ叢書第二編

歌集 改選 赤光

東京 春陽堂發行

CHENG YU TUNG EAST ASIAN LIBRARY
University of Toronto Library
130 St. George Street
8th Floor
Toronto, Ontario, Canada M5S 1A5

I

赤光目次

自明治三十八年至明治四十二年

1　折に觸れ（十七首）……………………三
2　地獄極樂圖（十一首）………………九
3　螢と蜻蛉（五首）……………………一三
4　折に觸れて（二十首）………………一五
5　蟲（八首）……………………………二三
6　雲（十四首）…………………………二五

7 萠しほ（八首）……三〇
8 留守居（八首）……三三
9 新年の歌（十四首）……三六
10 雜歌（十一首）……四一
11 鹽原行（四十四首）……四五
12 折に觸れて（二十首）……六〇
13 細り身（三十四首）……六七
14 分病室（四首）……七九

明治四十三年

1 田螺と彗星（八首）……八三

2 をさな妻（十一首）……………………八六
3 棹堀内卓（七首）……………………九〇

明治四十四年

1 此の日頃（八首）……………………九六
2 おくに（十七首）……………………九八
3 うつし身（十七首）……………………一〇四
4 うめの雨（二十首）……………………一一〇
5 藏王山（八首）……………………一一七
6 秋の夜ごろ（十七首）……………………一二〇
7 折に觸れて（廿首）……………………一二六

4

大正元年

1 睦岡山中（十一首）……一三五
2 木の實（八首）……一三九
3 或る夜（八首）……一四二
4 木こり（八首）……一四五
5 犬の長鳴（五首）……一四八
6 さみだれ（八首）……一五〇
7 折々の歌（二十六首）……一五三
8 夏の夜空（八首）……一六二
9 土屋文明へ（八首）……一六五

5

10 狂人守（八首）……一六八
11 海邊にて（廿首）……一七一
12 郊外の半日（十七首）……一七八
13 葬り火（廿首）……一八四
14 冬來（十四首）……一九一
15 柿の村人へ（十首）……一九六
16 ひとりの道（十四首）……二〇〇
17 青山の鐵砲山（八首）……二〇五
18 折に觸れて（八首）……二〇八
19 雪ふる日（八首）……二一一

20　宮益坂　（二首）……二一四

大正二年

1　さんげの心　（十七首）……二一七
2　根岸の里　（八首）……二二三
3　きさらぎの日　（八首）……二二六
4　神田の火事　（五首）……二二九
5　口ぶえ　（五首）……二三一
6　おひろ　（四十四首）……二三三
7　死にたまふ母　（五十九首）……二四九
8　みなづき嵐　（十四首）……二七〇

9 麥奴（八首）……………………一七五

10 七月二十三日（五首）……………………一七八

11 屋上の石（八首）……………………一八〇

12 悲報來（十首）……………………一八三

13 先師墓前（二首）……………………一八七

挿畫

蜜柑の收穫……木下杢太郎氏
彫刻……伊上凡骨氏
通草のはな……平福百穗氏
三色版……田中製版所
佛頭……木下杢太郎氏

自明治三十八年
至明治四十二年

1 折に觸れ

明治三十八年作

霜ふりて一(ひと)もと立(た)てる柿の木の柿はあはれに黒ずみにけり

淺草の佛(ほとけ)つくりの前來れば少女(をとめ)まぼしく落日(いりひ)を見るも

3

書(ふみ)よみて賢(かしこ)くなれと戰場(せんぢやう)のわが兄(あに)は錢(ぜに)を呉(く)れたまひたり

戰場(せんぢやう)の兄(あに)よりとどきし錢(ぜに)もちて泣き居たりけり涙おちつつ

馬屋(まや)のべにをだまきの花とぼしらにをりをり馬が尾を振りにけり

眞夏日の畑のなかに我居りて戰ふ兄をおもひけるかな

はるばると母は戰を思ひたまふ桑の木の實の熟める畑に

5 たらちねの母の邊にゐてくろぐろと熟める桑の實を食ひにけるかな

熱いでて一夜寝しかばこの朝け梅のつぼみを
つばらかに見つ

春風の吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみは
大きかりけり

桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひて斷りて居れば
にほひするかも

入りかかる日の赤きころニコライの側の坂を
ば下りて來にけり

寢て思へば夢の如かり山燒けて南の空はほの
赤かりし

さ庭べの八重山吹の一枝散りしばらく見ねば
みな散りにけり

數學のつもりになりて考へしに五目ならべに
勝ちにけるかも

かたむく日すでに眞赤くなりたりと物干に出
でて欠せりけり

ゆふさりてランプともせばひと時は心靜まり
て何もせず居り

2　地獄極樂圖

明治三十九年作

浄玻璃(じやうはり)にあらはれにけり脇差(わきざし)を差して女(をんな)をいぢめるところ

飯(いひ)の中(なか)ゆとろとろと上(のぼ)る炎(ほのほ)見てほそき炎口(えんく)のおどろくところ

赤き池にひとりぼつちの眞裸のをんな亡者の泣きゐるところ

いろいろの色の鬼ども集りて蓮の華にゆびさすところ

人の世に嘘をつきけるもろもろの亡者の舌を拔き居るところ

罪計に涙ながしてゐる亡者つみを計れば巌より重き

にんげんは牛馬となり岩負ひて牛頭馬頭どもの追ひ行くところ

をさな児の積みし小石を打くづし紺いろの鬼見てゐるところ

もろもろは裸になれと衣剝ぐひとりの婆の口
赤きところ

白き華しろくかがやき赤き華あかき光を放ち
ゐるところ

ゐるものは皆ありがたき顏をして雲ゆらゆら
と下り來るところ

3 螢と蜻蛉

明治三十九年作

蠶の部屋に放ちし螢あかねさす晝なりしかば
首すぢあかし

蚊帳のなかに放ちし螢夕さればおのれ光りて
飛びそめにけり

あかときの草の露玉七いろにかがやきわたり
蜻蛉うまれぬ

あかときの草に生れて蜻蛉はも未だ軟らかみ
飛びがてぬかも

小田のみち赤羅ひく日はのぼりつつ生れし蜻
蛉もかがやきにけり

4 折に觸れて

明治三十九年作

來て見れば雪消の川べしろがねの柳ふふめり
蕗の薹も咲けり　（早春二首）

あづさゆみ春は寒けど日あたりのよろしき處
つくづくし萌ゆ

生きて來し丈夫がおも赤くなり踊るを見れば
嬉しくて泣かゆ　（凱旋二首）

凱旋り來て今日のうたげに酒をのむ海のますらをに髯あらずけり

み佛の生れましの日と玉蓮をさな朱の葉池に
浮くらし　（佛生會二首）

み佛の御堂に垂るゝ藤なみの花のむらさき未
だともしも

青玉のから松の芽はひさかたの天にむかひて
竝びてを萌ゆ　（若芽二首）

はるさめは天の乳かも落葉松の玉芽あまねく
ふくらみにけり

みちのくの佛の山のこごしこごし岩秀に立ち
て汗ふきにけり　（立石寺一首）

天の露おちくるなべに現し世の野べに山べに
秋花咲けり

涅槃會をまかりて來れば雪つめる山の彼方に
夕燒のすも

小瀧まで行き著きがてにくたびれし息づく坂よ
山鳩のこゑ

夕ひかる里つ川水夏くさにかくるる處まろき
山見ゆ

淡青の遠のむら山たび來つるわが目によしと
寢つつ見にけり

火の山を繞る秋雲の八百雲をゆらに吹きまく
天つ風かも　（藏王山五首

岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れて
かがやきにけり

天なるや群がりめぐる高ぼしのいよいよ清し
山高みかも

雲の中の藏王の山は今もかもけだもの住まず
石あかき山

あめなるや月讀の山はだら牛うち臥すなして
目に入りにけり

病癒えし君がにぎ面の髯あたり目にし浮びて
うれしくてならず
（蕨眞氏病癒ゆ）

5 蟲

明治四十年作

花につく赤小蜻蛉(あかこあきづ)もゆふされば眠りにけらし
こほろぎのこゑ

とほ世べの戀のあはれをこほろぎの語(かた)り部(べ)が
夜々つぎかたりけり

月落ちてさ夜ほの暗く未だかも彌勒(みろく)は出でず
蟲鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに蟲鳴くと書(ふみ)に殘りて
年ふりにけり

てる月の清き夜ごろを蟋蟀(こほろぎ)やねもころころに
率寢(ゐね)て鳴くらむ

23

きのふ見し千草もあらず蟲の音も空に消入り
うらさびにけり

あきの夜のさ庭に立てば土の蟲音はほそほそ
と悲しらに鳴く

なが月の秋ゐらぎ鳴くこほろぎに螻蛄も交り
てよき月夜かも

6
雲

明治四十年作

かぎろひの夕べの空に八重(やへ)なびく朱(あけ)の旗(はた)ぐも
遠(とほ)にいざよふ

岩根ふみ天路(あめぢ)をのぼる脚底(あしそこ)ゆいかづちぐもの
湧き巻きのぼる

藏王の山はらにして目を放つ磐城の諸嶺くも
湧ける見ゆ

底知らに瑠璃のただよふ天の門に凝れる白雲
誰まつ白雲

岩ふみて吾立つやまの火の山に雲せまりくる
五百つ白雲

遠ひとに吾戀ひ居れば久かたの天のたな雲に
鶴とびにけり

あめつちの寄り合ふきはみ晴れとはる高山の
背に雲ひそむ見ゆ

八重山の八谷かぜ起る時のまや峡間みなぎり
て雲たちわたる

たくひれのかけのよろしき妹（いも）が名（な）の豊旗雲（とよはたぐも）と
誰（た）がいひそめし

小旗（こはた）ぐも大旗雲（おほはたぐも）のなびかひに今（いま）し八尺（やさか）の日（ひ）は
入らむとす

いなびかりふくめる雲のたたずまひ物ほしに
のぼりつくづくと見つ

ひと國(くに)をはるかに遠き天(あま)ぐもの氷(ひ)雲(ぐも)のほとり
行くは何ぞも

雲に入る藥もがもと雲戀ひしもろこしの君は
昔死にけり

ひむがしの天(あめ)の八重(やへ)垣(がき)しろがねと笹べり耀(かゞや)く
渡津見(わたつみ)の雲

7 苅しほ

明治四十年作

秋のひかり土にしみ照り苅しほに黄ばめる小田を馬の來る見ゆ

竹おほき山べの村の冬しづみ雪降らなくに寒に入りけり

ふゆの日のうすらに照れば竹群(たかむら)は寒々(さむさむ)として
霜しづくすも

窓の外(と)に月照りしかば竹の葉のさやのふる舞(まひ)
あらはれにけり

霜の夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群(たかむら)が奥
に朱(あけ)の月みゆ

竹むらの影にむかひて琴ひかば清搔にしも彈くべかりけり

月あかきもみぢの山に小猿ども天つ領布など欲りしてをらん

猿の子の目のくりくりを面白み日の入りがたをわがかへるなり

8 留守居

明治四十年作

まもりゐる縁の入日に飛びきたり蠅が手を採む
むに笑ひけるかも

留守居して一人し居れば青光る蠅のあゆみを
おもひ無に見し

留守をもるわれの机にえ少女(をとめ)のえ少男(をとこ)の蠅が
ゐらぎ舞ふかも

秋の日の疊の上に飛びあよむ蠅の行ひ見つつ
留守すも

入日さすあかり障子(しやうじ)は薔薇(はら)色(いろ)にうすら匂(にほ)ひて
蠅一つ飛ぶ

事なくて見ゐる障子に赤とんぼかうべ動かす
羽（はね）さへふるひ

まもりゐのあかり障子にうつりたる蜻蛉（あきづ）は去
りて何も來ぬかも

留守もりて入日（いりひ）むかけれ紙ふくろ猫に冠（かむ）せん
とおもほえなくに

9 新年の歌

明治四十一年作

今しいま年の來るとひむがしの八百うづ潮に
茜かがよふ

高ひかる日の母を戀ひ地の廻り廻り極まりて
天新たなり

東海に磤馭盧生れていく繼ぎの眞日美はしく
天明けにけり

ひむがしの朱の八重ぐもゆ斑駒に乘りて來らしも年の若子は

にひとしの眞日のうるはしくれなゐを高きに上り目蔭して見つ

新装ふ日の大神の清明目を見まくと集ふ現し
もろもろ

天明り年のきたるとくだかけの長鳴鳥がみな
鳴けるかも

しだり尾の雞の雄鳥が鳴く聲の野に遠音して
年明けにけり

ひむがしの空押し晴るし守（まも）らへる大和島根に
春立てるかも

うるはしと思ふ子ゆゑに命欲り夢のうつらと
年明けにけり

沖つとりかもかもせむと初春にこころ問（どひ）して
見まくたぬしも

おほきみの大城(おほき)の森の濃(こ)緑(みどり)のいやとことはに
年ほぐらしも

豊(とよ)酒(みき)の屠蘇に吾ゑへば鬼(おに)子(こ)ども皆死しにけり
赤き青きも

くれなゐの梅はよろしもあらたまの年の始に
見ればよろしも

10 雜歌

明治四十一年作

あかときの畑(はたけ)の土のうるほひに散れる桐の花
ふみて來にけり

青桐(あをぎり)のしみみ廣葉(ひろは)の葉かげよりゆふべの色は
ひろごるらしき

ひむがしのともしび二つこの宵(よひ)も相寄らなく
てふけわたるかな

うつそみのこの世のくにに春さりて山焼くる
かも天(あめ)の足(たり)夜(よ)を

ひさ方の天(あめ)の赤(あか)瓊(ね)のにほひなし遙けきかもよ
山焼くる火は

うつし世は一夏に入りて吾がこもる室の疊に
蛾を見しかな

眞夏日の雲のみね天のひと方に夕退きにつつ
かがやきにけり

荒磯ねに八重寄る波のみだれたちいたぶる中
の寂しさ思ふ

秋の夜の灯しづかに搖るる時しみじみわれは耳かきにけり

ほそほそとこほろぎ鳴くに壁にもたれ膝に手を組む秋の夜かも

旅ゆくと泉に下りて冷々に我が口そそぐ月くさのはな

11 鹽原行

明治四十一年作

晴れ透(とほ)るあめ路(ち)の果てに赤城(あかぎ)嶺(ね)の秋の色はも
更け渡りけり

小(を)筑波(つくば)を朝を見しかば白雲の凝れるかかむり
動くともせず

關屋いでて坂路になればちらりほらり染めた
る木々が見えきたるかも

おり上り通り過がひしうま二つ遙かになりて
尾を振るが見ゆ

山角にかへり見すれば歩み來し街道筋は細り
てはるけし

馬車とどろ角（くだ）を吹き吹き鹽はらのもみづる山
に分け入りにけり

山路（やまぢ）わだ紅葉はふかく山たかくいよよ逼（せま）り來（く）
わがまなかひに

つぬさはふ岩間（いはま）を垂るるいは水のさむざむと
して土わけ行くも

とうとうと喇叭を吹けば鹽はらの深染の山に
馬車入りにけり

湯のやどのよるのねむりはもみぢ葉の夢など
見つつねむりけるかも

夕ぐれの川べに立ちて落ちたぎつ流るる水に
おもひ入りたり

あかときを目ざめて居ればくだの音(ね)の近くに
止(や)みぬ馬車着けるらし

床ぬちにぬくまり居れば宿(やど)つ女(め)が起きねと云
へど起きがてぬかも

世のしほと言(こと)のたふとさ名(な)に負(お)へる鹽はらの
山色づきにけり

谷川の音をききつつ分け入れば一あしごとに
山あざやけし

山深くひた入り見むと露じもに染(そ)みし紅葉(もみぢ)を
踏みつつぞ行く

三千尺(みちさか)の目下(ました)の極(きは)みかがよへる紅葉(もみぢ)のそこに
水たぎち見ゆ

かへりみる谷の紅葉の明(あき)らけく天(あめ)にひびかふ山がはの鳴り

現(うつ)し身(み)が戀心(こひごころ)なす水の鳴りもみぢの中に籠(こも)りて鳴るも

山川(やまがは)のたぎちのどよみ耳底(みみそこ)にかそけくなりて峰を越えつも

ふみて入るもみぢが奥は横(よこた)はる朽ち木の下を
水ゆく音す

山がはの水のいきほひ大岩にせまりきはまり
音とどろくも

うつそみは常(つね)なけれども山川に映(は)ゆる紅葉を
うれしみにけり

うつし身の稀らにかよふ秋やまに親(した)しみて鳴
く蟋蟀のこゑ

打ちわたす山の雑木(ざふき)の黄にもみぢ明(あか)るき峡(かひ)に
道入りにけり

もみぢ原ゆふぐれしづむ蟋蟀はこの寂しさに
堪へて鳴くなり

つかれより美(うつく)し夢(ゆめ)に入る如き思ひぞ吾がする
蟋蟀のころ

もみぢ照りあかるき中に我が心空しくなりて
しまし居りけり

しほ原の湯の出でどころとめ來ればもみぢの
赤き處なりけり

山の湯のみなもとどころ鐵(かね)色(いろ)にさびにけるか
な草もおひなく

鐵(かね)さびし湯の源(みなもと)のさ流に蟹がいくつも死にて
居たりし

あまつ日は山のいただきを照らしたりふかき
峽間(はざま)の道のつゆじも

親馬（おやうま）にあまえつつ來る仔馬（こうま）にし心動きて過ぎ
がてにせり

あしびきの山のはざまの西開き遠（とほ）くれなゐに
夕燒くる見ゆ

橋のべのちひさ楓（かへるで）かへり路（ぢ）になかくれなゐと
染めて居りけり

天地(あめつち)のなしのまにまに寄り合へる貝の石あは
れとことはにして

ほり出(いだ)すいはほのひまの貝の石ただ珍らしみ
ありがてぬかも

おくやまの深き岩間(いはま)ゆ海つもの石と成り出づ
君に戀ふるとき

もみぢばの過ぎしを思ひ繁き世に生きつるなべに悲しみにけり

山峽のもみぢに深く相こもりほれ果てなむか峽のもみぢに

もみぢ斑の山の眞洞に雲おり來雲はをとめの領巾漏らし來も

火に見ゆる玉手の動き少女らは何に天降りて
もみぢをか焚く

天そそる白くもが上のいかし山夜見の國さび
月かたむきぬ

まほろしにもの戀ひ來れば山川の鳴る谷際に
月滿てりけり

12 折に觸れて

明治四十二年作

潮沫のはかなくあらばもろ共にいづべの方に
ほろびてゆかむ

やうらくの珠はかなしと歎かひし女のこゝろ
うつらさびしも

宵あさくひとり籠ればうらがなし雨蛙(あまがへる)ひとつ
かいかいと鳴くも

をさな妻こころに守(まも)り更けしづむ灯火(ともしび)の蟲を
殺してゐたり

かがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き
居れば砂うごくかな

夏晴れのさ庭の木かげ梅の實のつぶらの影も
さゆらぎて居り

春(はる)闌(た)けし山(やま)峡(かひ)の湯にしづ籠り楤(たら)の芽食(を)しつつ
ひとを思はず

馬に乗り湯どころ來つつ白梅のとととのふ春に
あひにけるかも

ひとり居て卵うでつつたぎる湯にうごく卵を
見ればうれしも

干柿(ほしがき)を弟の子に呉れ居れば淡々(あはあは)と思ひいづる
ことあり

ゆふぐれのほどろ雪路(ゆきみち)をかうべ垂れ濡れたる
靴をはきて行くかも

世のなかの憂苦も知らぬ女わらはの泣くこと
はあり涙ながして

春の風ほがらに吹けばひさかたの天の高低に
凧が浮べり

萱ざうの小さき萌を見てをれば胸のあたりが
うれしくなりぬ

青山の町かげの田の畔みちをそぞろに來つれ
春あさみかも

春あさき小田の朝道あかあかと金氣浮く水に
かぎろひのたつ

明けがたに近き夜さまのおのづから我心にし
觸るらく思ほゆ

天竺のほとけの世より子らが笑にくからなく
て君も笑むかな

さみだれはきのふより降り行々子をほのぼの
やさしく聞く今宵かも

八百會のうしほ遠鳴るひむがしのわたつ天明
雲くだるなり

13 細り身

明治四十二年作

重かりし熱の病のかくのごと癒えにけるかと
かひな撫(さす)るも
蜩(かな)蟬(かな)のまだかくに鳴くあかつきを衰へはてて
ひとり臥(ふ)し居り

あなうま粥強飯を食すなべに細りし息の太りゆくかも

おとろへて寝床の上にものおもふ悲しきかなや蠅の飛ぶさへ

たまたまに現しき時はわが命生きたかりしかこのうつし世に

病みて思ふほのぼのとしてあり經たる和世の
我に悔は多かり

いはれ無に涙がちなるこのごろを事更ぶとも
ひと云ふらむか

しまし間も今の悶への酒狂になるを得ばかも
嬉しかるべし

閉づる目ゆ熱き涙のはふり落ちはふり落ちつ
つあきらめ兼ねつ

やみ恍けおとろへにたれさ庭べに夕雨ふれば
嬉しくきこゆ

みちのくに我稚くて熱を病みしことを仄かに
思ひいでつも

おとろへし胸に眞手（まで）おき寂しめる我に聞ゆる
蜩（ひぐらし）のこゑ

熱落ちて衰（おとろ）へ出で來（く）このごろの日（ひ）八（や）日（か）夜（よ）八（や）夜（よ）
は現（うつ）しからなく

恣にやせ頰（ほ）にのびし硬（こわ）ひげを手（た）ぐさにしつつ
さ夜ふけにけり

うそ寒くなりて目ざめし室(へや)の外(と)は月清く照り
雞(かけ)なくきこゆ

かうべあげ見れば狹(さ)庭(には)の椎の木(こ)の間(ま)おほき月
入るよるは靜かに

ぬば玉のふくる夜(よ)床(どこ)に目ざむればをなご狂(きちがひ)の
歌ふがきこゆ

日を繼ぎて現身(うつしみ)さぶれ蟬の聲もいよよ清(すが)しくなりにけるかな

現身(うつしみ)は悲しけれどもあはれあはれ命(いのち)いきなむとつひにおもへり

おのが身しいとほしければかほそ身をあはれがりつつ飯(いひ)食(を)しにけり

火鉢べにほほ笑ひつつ花火する子供と居れば
われもうれしも

病みて臥すわが枕べに弟妹らがこより花火を
して呉れにけり

わらは等は汝兄の面のひげ振りのをかしなど
いひ花火して居り

平凡に堪へがたき性(さが)の童幼(わらは)ども花火に飽きて
みな去りにけり

⁂

とめどなく物思ひ居ればさ庭べに未だいはけ
なく蟋蟀鳴くも

宵淺き庭を歩めばあゆみ路(ぢ)のみぎりひだりに
蟋蟀鳴くも

つめたき土にうまれし蟋蟀(こほろぎ)のまだいはけなく
鳴ける寂しさ

さ庭べに何の蟲ぞも鉦(かね)うちて乞ひのむがごと
ほそほそと鳴くも

なにゆゑに花は散りぬる理法(ことわり)と人はいふとも
悲しくおもほゆ

たまゆらに仄(ほの)觸(ふ)れにけれ延(は)ふ蔦(つた)の別れて遠し
かなし子等はも

いつくしく瞬(また)きひかる七(な)星(ほし)の高(たか)天(あめ)の戸にちか
づきにけり

神無月の土の小床にほそほそと亡びのうたを
蟲鳴きにけり

うらがれにしづむ花野の際涯よりとほくゆく
らむ霜夜こほろぎ

よひよひの露冷えまさる遠空をこほろぎの子
らは死にて行くらむ

14 分病室

明治四十二年作

この度(たび)は死ぬかも知れずと思(も)ひし玉(たま)ゆら氷枕(へうちん)
の氷(こほり)とけ居たりけり

隣(りん)室(しつ)に人は死ねどもひたぶるに帚(はゝき)ぐさの實(み)食
ひたかりけり

熱落ちてわれは日ねもす夜もすがら稚な兒の
ごど物を思へり

のびあがり見れば霜月の月照りて一本松のあ
たまのみ見ゆ

明治四十三年

1 田螺と彗星

とほき世のかりようびんがのわたくし兒田螺(たにし)
はぬるきみづ戀ひにけり

田螺はも背戸(せと)の圓(まろ)田(た)にゐると鳴かねどころり
ころりと幾つもゐるも

わらくずのよごれて散れる水無田に田螺の殻
は白くなりけり

氣ちがひの面まもりてたまさかは田螺も食べ
てよるに寝ねたる

赤いろの蓮まろ葉の浮けるとき田螺はのどに
みごもりぬらし

味噌うづの田螺たうべて酒のめば我が咽喉佛
うれしがり鳴る

ためらはず遠天に入れと彗星の白きひかりに
酒たてまつる

うつくしく瞬きてゐる星ぞらに三尺ほどなる
ははき星をり

2 をさな妻

墓はらのとほき森よりほろほろと上るけむり
に行かむとおもふ

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさに
づらふ時たちにけり

をさな妻こころに持ちてあり經(ふ)れば赤小蜻蛉(あかこあきつ)
の飛ぶもかなしき

目を閉づれすなはち見ゆる淡々し光に戀ふる
もさみしかるかな

ほこり風立ちてしづまるさみしみを市路(いちぢ)ゆき
つつかへりみるかも

このゆふべ塀にかわけるさび紅(あけ)のべにがらの
垂りをうれしみにけり

嘴(はし)あかき小鳥さへこそ飛ぶならめはるばる飛
ばば悲しきろかも

細みづにながるる砂の片寄りに静まるほどの
うれひなりけり

水さびゐる細江の面に浮きふふむこの水草は
うごかざるかな

汗ばみしかうべを垂れて拔け過ぐる公園に今
しづけさに會ひぬ

をさな妻ほのかに守る心さへ熱病みしより細
りたるなれ

3 悼堀内卓

堀内はまことに死にたるかありの世かいめ世か
くやしいたましきかも

信濃路のゆく秋の夜のふかき夜をなにを思ひ
つつ死にてゆきしか

うつそみの人の國をば君去りて何邊(いづべ)にゆかむ
ちちははをおきて

早(はや)はやも癒(なほ)りて來よと祈(の)むわれになにゆゑに
逝きし一言(ひとこと)もなく

いまよりはまことこの世に君なきかありと思
へどうつつにはなきか

深き夜のとづるまなこにおもかげに見えくる
友をなげきわたるも

霜ちかき蟲のあはれを君と居て泣きつゝ聞か
むと思ひたりしか（十月作）

明治四十四年

1 此の日頃

よるさむく火を警むるひようしぎの聞え來る
頃はひもじかりけり

こよひはいまだ淺宵なれど床ぬちにのびつつ
何か考へむとおもふ

尺八のほろほろと鳴りて行く音も此世の涯に
遠ざかりなむ

入りつ日の赤き光のみなぎらふ花野はとほく
恍け溶くるなり

さだめなきものの魘の來る如く胸ゆらぎして
街をいそげり

うらがなしいかなる色の光はや我のゆくへに
かがよふらむか

生くるものの我のみならず現し身の死にゆくを
聞きつつ飯食しにけり

をさなごの獨り遊ぶを見守りつつ心よろしく
なりてくるかも（一月作）

2　おくに

なにか言ひたかりつらむその言も言へなくなりて汝は死にしか

はや死にて汝はゆきしかいとほしと命のうちにいひにけむもの

終に死にて往かむ今際の目にあはず涙ながら
にわれは居るかな

なにゆゑに泣くと額なで虚言も死に近き子に
吾は言へりしか

うつし世のかなしき汝に死にゆかれ生きの命
も今は力なし

もろ足もかいほそりつつ死にし汝があはれに
なりてここに居りがたし

ひとたびは癒りて呉れよとうら泣きて千重に
いひしがつひに空しき

この世にし生きたかりしか一念も申さず逝き
しをあはれとおもふ

何(ただ)も彼(か)もあはれになりて思ひづるお國のひと
世はみぢかかりしか

せまりくる現實(うつつ)は悲ししまらくも漂(ただよ)ふごとき
ねむりにゆかむ

やすらなる眠(ねむり)もがもと此の日ごろ眠(ねむり)ぐすりに
親しみにけり

なげかひも人に知らえず極まれば何に縋りて
吾は行きなむか

しみ到るゆふべのいろに赤くゐる火鉢のおき
のなつかしきかも

現身のわれなるかなと歎かひて火鉢をちかく
身に寄せにけり

ちから無く鉛筆きればほろほろと紅（くれなゐ）の粉（こ）が落
ちてたまれり

灰のへにくれなゐの粉の落ちゆくを涙ながし
ていとほしむかも

生きてゐる汝（なれ）がすがたのありありと何（なに）に今頃
見えきたるかや（一月作）

3　うつし身

雨にぬるる廣葉細葉の若葉森あが言ふこゑの
やさしくきこゆ

いとまなき吾なればいま時の間の青葉の搖(ゆれ)も
見むとしおもふ

しみじみとおのれ親しき朝じめり墓(はか)原(はら)の蔭に
道ほそるかな

やはらかに濡れゆく森のゆきずりに生(いき)の命(いのち)の
吾をこそ思へ

よにも弱き吾なれば忍ばざるべからず雨ふる
よ若葉かへるで

うつしみは死しぬ此(かく)のごと吾(あ)は生きて夕(ゆふ)いひ
食(を)しに帰りなむいま

黒土に足駄の跡のつづけるを墓のほそみちに
かへり見にけり

うちどよむ衢(ちまた)のあひの森かげに残るみづ田を
いとしくおもふ

青山の町蔭の田の水さび田にしみじみとして
雨ふりにけり

森かげの夕ぐるる田に白きとり海とりに似し
ひるがへり飛ぶ

寂し田に遠来し白鳥見しゆゑに弱ければ吾は
うれしくて泣かゆ

くわん草は丈ややのびて濕りある土に戰げり
このいのちはや

はるの日のながらふ光に青き色ふるへる麥の
嫉くてならぬ

春淺き麥のはたけにうごく蟲手ぐさにはすれ
悲しみわくも

うごき行く蟲を殺してうそ寒く麥のはたけを
横ぎりにけり

いとけなき心葬りのかなしさに蒲公英を掘る
せとの岡べに

仄かにも吾に親しき豫言をいはまくすらしき
黄いろ玉はな（四月五月作）

4 うめの雨

おのが身をいとほしみつつ歸り來る夕細道(ゆふほそみち)に
柿の花落つも

はかなき身も死にがてぬこの心君し知れらば
共に行きなむ

III

さみだれのけならべ降れば梅の實の圓大きく
ここよりも見ゆ

天に戰ぐほそ葉わか葉に群ぎもの心寄りつつ
なげかひにけり

かぎろひのゆふさりくれど草のみづかくれ水
なれば夕光なしや

ゆふ原の草かげ水にいのちいくる蛙(かへる)はあはれ
啼きたるかなや

うつそみの命は愛しとなげき立つ雨の夕原(ゆふはら)に
音鳴(な)くものあり

くろ〱散る通草(あけび)の花のかなしさを稚(をさな)くてこそ
おもひそめしか

おもひ出も遠き通草の悲し花きみに知らえず
散りか過ぎなむ

道のべの細川もいま濁りみづいきほひながる
夜の雨ふり

汝兄よ汝兄たまごが鳴くといふゆゑに見に行
きければ卵が鳴くも

あぶなくも覺束なけれ黄いろなる圓きうぶ毛
が歩みてゐたり

見てを居り心よろしも鷄の子はついばみ乍ら
ゐねむりにけり

庭つとり鷄のひよこも心がなし生れて鳴けば
母にし似るも

乳のまぬ庭とりの子は自づから哀れなるかも
よ物食みにけり

常のごと心足らはぬ吾ながらひもじくなりて
今かへるなり

たまたまに手など觸れつつ添ひ歩む枳殻垣に
ほこりたまれり

ものがくれひそかに煙草すふ時の心よろしさ
のうらがなしかり

青葉空雨になりたれ吾はいまこころ細ほそと
別れゆくかも

天さかり行くらむ友に口寄せてひそかに何か
いひたきものを（五月六月作）

5 藏王山

藏王をのぼりてゆけばみんなみの吾妻の山に
雲のゐる見ゆ

たち上る白雲のなかにあはれなる山鳩啼けり
白くものなかに

ま夏日の日のかがやきに櫻實(さくらご)は熟(う)みて黑しも
われは食(は)みたり

あまつ日に目(ま)陰(かげ)をすれば乳いろの湛(たたへ)かなしき
みづうみの見ゆ

死にしづむ火(くわ)山(ざん)のうへにわが母の乳(ち)汁(しる)の色の
みづ見ゆるかな

秋づけばはらみてあゆむけだものも酸のみづなれば舌觸りかねつ

赤蜻蛉むらがり飛べどこのみづに卵うまねばかなしかりけり

ひんがしの遠空にして一すぢのひかりは悲し荒磯しらなみ（八月作）

6 秋の夜ごろ

玉きはる命（いのち）をさなく女童（めわらは）をいだき遊びき夜半（よは）
のこほろぎ

こよひもひとりねむるとうつらうつら悲しき
蟲に聞きほくるなり

ことわりもなき物怨み我身にもあるが愛しく
蟲ききにけり

少年の流されびとをいたましとこころに思ふ
蟲しげき夜に

秋なればこほろぎの子の生れ鳴く冷たき土を
かなしみにけり

少年の流され人はさ夜の小床に蟲なくよ何の
蟲よといひけむ

かすかなるうれひにゆるるわが心蟋蟀聞くに
堪へにけるかな

蟋蟀の音にいづる夜の靜けさにしろがねの錢
かぞへてゐたり

紅き日の落つる野末の石の間のかそけき蟲に
聞き入りにけり

足もとの石のひまより靜けさに顫ひて出づる
こほろぎのこゑ

入りつ日の入りかくろへば露滿つる秋野の末
にこほろぎ鳴くも

うちどよむちまたを過ぎてしら露のゆふ凝る
原にわれは來にけり

星おほき花原くれば露は凝りみぎりひだりに
こほろぎ鳴くも

濠のみづ干ゆけばここに細き水流れ會ふかな
夕ひかりつつ

女(め)の童(わらは)をとめとなりて泣きし時かなしく吾は
おもひたりしか

さにづらふ少女ごころに酸漿(ほほづき)の籠(こも)らふほどの
悲しみを見し

こほろぎはこほろぎゆゑに露原に音をのみぞ
鳴く音をのみぞ鳴く（九月作）

7 折に觸れて

なみだ落ちて懐しむかもこの室にいにしへ人は死に給ひにし（子規十周忌三首）

自からをさげすみ果てし心すら此夜はあはれ和みてを居ぬ

しづかに眼(め)をつむり給ひけむ自(おの)づからすべて
は冷(つめ)たくなり給ひけむ

涙ながししひそか事も消ゆるかや吾(あ)より秋な
れば桔梗(きちかう)は咲きぬ（錄三首）

きちかうのむらさきの花萎(しぼ)む時わが身は愛(は)し
とおもふかなしみ

さげすみ果てしこの身も堪へ難くなつかしき
ことありあはれあはれわが少女(をとめ)

栗の實の笑(ゑ)みそむるころ谿越えてかすかなる
灯に向ふひとあり（錄三首）

かどはかしに逢へるをとめの物語(ものがたり)あはれみに
つつ谿越えにけり

死に近き狂人を守るはかなさに己が身すらを
愛しとなげけり

照り透るひかりの中に消ぬべくも蟋蟀と吾と
なげかひにけり

つかれつつ目ざめがちなるこの夜ごろ寐より
さめ聞くながれ水かな

朝さざれ踏みの冷めたくあなあはれ人の思の
湧きぎたるかも

秋川のさゞれ踏み往き踏み來とも落ちゐぬ心
君知るらむか

土のうへの生けるものらの潜むべくあな慌し
秋の夜の雨

秋のあめ煙りて降ればさ庭べに七面鳥は羽も
ひろげず

寒ざむとひと夜の雨のふりしかば病める庭鳥
をいたはり兼ねつ

ほそほそとこほろぎの音はみちのくの霜ふる
國へとほ去りぬらむ

遠き世のガレーヌスは春のあけぼの
Ornamentum loci をかなしみぬ。われは
東海の國の伽羅の木かげ Pluma loci と
いひてなげかふ。

大正元年

1 睦岡山中

寒(さむ)ざむとゆふぐれて來る山のみち歩めば路(みち)は
濡(ぬ)れてゐるかな

山ふかき落葉のなかに光り居る寂しきみづを
われは見にけり

しづかなる眼のごときひかりみづ山の木原に
動かざるかも

われひとり山を越えつつ見入りたる水はする
どく寒くひかれり

都會のどよみをとほくこの水に口觸れまくは
悲しかるらむ

天さかる鄙の山路にけだものの足跡を見れば
こころよろしき

なげきより覺めて歩める山峽に黑き木の實は
こぼれ腐りぬ

寂しさに堪へて空しき吾の身に何か觸れて來
悲しかるもの

ふゆ山に潜(ひそ)みて木末(こぬれ)のあかき實を啄(ついば)みてゐる
鳥見つ今は

かぜおこる木原(きはら)をとほく入(い)つ日(ひ)のあかき光は
ふるひ流るも

赤光(しやくくわう)のなかの歩みはひそか夜の細きかほそき
こころにか似む（一月作）

2 木の實

しろがねの雪ふる山に人かよふ細ほそとして
路見ゆるかな

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき
歩みなりけり

滿ち足らふ心にあらぬ谿谷(たに)つべに酢をふける
木の實を食(は)むこころかな

山遠く入りても見なむうら悲しうら悲しとぞ
人いふらむか

紅(べに)蕈(たけ)の雨にぬれゆくあはれさを人に知らえず
見つつ來にけり

山ふかく谿の石原しらじらと見え來るほどの
いとほしみかな

かうべ垂れ我がゆく道にぼたりぼたりと橡の
木の實は落ちにけらずや

ひとり居て朝の飯食む我が命は短かからむと
思ひて飯はむ（一月作）

3 或る夜

くれなゐの鉛筆きりてたまゆらは愼しきかな
われのこころの

をさな妻をとめとなりて幾百日こよひも最早
眠りゐるらむ

寝ねがてにわれ烟草すふ烟草すふ少女は最早
眠りゐるらむ

いま吾は鉛筆をきるその少女安心をして眠り
ゐるらむ

我友は蜜柑むきつつしみじみとはや抱きねと
いひにけらずや

けだものの暖かさうな寢(いね)すがた思ひうかべて
獨り寢にけり

寒床(さむどこ)にまろく縮まりうつらうつら何時(いつ)のまに
かも眠りゐるかな

水のべの花(はな)の小花(こはな)の散りどころ盲目(めしひ)になりて
抱(いだ)かれて呉れよ（一月作）

4 木こり

山腹(やまはら)の木はらのなかへ堅凝(かたこり)のかがよふ雪を踏みのぼるなり

ゆらゆらと空氣を搖(ゆ)りて伐られたり斧の光れば大木(おほき)ひともと

斧ふりて木を伐る側に小夜床の陰のかなしさ
歌ひてゐたり

雪の上を行けるをみなは堅飯と赤子を背負ひ
うたひて行けり

雪のべに火がとろとろと燃えぬれば赤子は乳
をのみそめにけり

杉の樹の肌に寄ればあなかなしくれなゐの油
滲み出るかなや

はるばるも來つれこころは杉の樹の紅の脂に
寄りてなげかふ

みちのくの藏王の山のやま腹にけだものと人
と生きにけるかも（二月作）

5 犬の長鳴

よる更けてふと握飯(にぎりめし)くひたくなり握飯(にぎりめし)くひぬ
寒がりにつつ

われひとりねむらむとしてゐたるとき外(そと)はこ
がらしの行くおときこゆ

遠く遠く流るるならむ灯をゆりて冬の疾風は
外面に吹けり

長鳴くはかの犬族のなが鳴くは遠街にして火
かもおこれる

さ夜ふけと夜の更けにける暗黒にびようびよ
うと犬は鳴くにあらずや（二月作）

6 さみだれ

さみだれは何(なに)に降(ふ)りくる梅の實は熟(う)みて落つ
らむこのさみだれに

にはとりの卵の黄(き)味(み)の亂れゆくさみだれごろ
のあぢきなきかな

胡頽子(ぐみ)の果のあかき色ほに出づるゆゑ秀(ほ)に出づるゆゑに歎かひにけり（おくにな憶ふ）

ぬば玉のさ夜の小床(をどこ)にねむりたるこの現身(うつしみ)は
いとほしきかな

しづかなる女おもひてねむりたるこの現身(うつしみ)は
いとほしきかな

鳥の子の孵(すもり)に果てむこの心もののあはれと云はまくは憂(う)し

あが友の古(こ)泉(いづみ)千(ち)樫(かし)は貧しけれさみだれの中をあゆみゐたりき

けふもまた雨かとひとりごちながら三州味噌をあぶりて食(は)むも　（六月作）

7 折々の歌

とろとろとあかき落葉火もえしかば女の男の
童あたりけるかも

雨ひと夜さむき朝けを目の下の死なねばなら
ぬ鳥見て立てり

ひとよ寝し街(まち)の悲しきひそみ土ここに白霜(しろしも)は
降りてゐるかも

猫の舌のうすらに紅(あか)き手ざはりのこの悲しさ
を知りそめにけり

ほのかなる茗荷(めうが)の花を目守(まも)る時わが思ふ子は
はるかなるかも

をさな兒の遊びにも似し我がけふも夕かたまけてひもじかりけり（研究室二首）

屈まりて腦の切片を染めながら通草のはなをおもふなりけり

みちのくの我家の里に黑き蠶が二たびねぶり目ざめけらしも（故郷三首）

みちのくに病む母上にいささかの胡瓜を送る
障りあらすな

おきなぐさに脣ふれて帰りしがあはれあはれ
いま思ひ出でつも

秋に入る練兵場のみづたまりに小蜻蛉が卵を
生みて居りけり

曼珠沙華ここにも咲きてきぞの夜のひと夜の
相おもほゆるかも

現身のわれをめぐりてつるみたる赤き蜻蛉が
幾つも飛べり

酒の糟あぶりて室に食むこころ腎虚のくすり
尋ねゆくこころ

けふもまた向ひの岡に人あまた群れゐて人を
葬りたるかな

何ぞもとのぞき見しかば弟妹らは甑に酒をば
飲ませてゐたり

太陽はかくろひしより海空に天の血垂りの雲
のたなびき

狂院に寝てをれば夜は温るし我がまぢかくに
蟾蜍は啼きたり

伽羅ぼくに伽羅の果こもりくろき猫ほそりて
あゆむ夏のいぶきに

蛇の子は色くろぐろとうまれつつ石の間にも
かくろひぬらむ

ほそき雨墓原に降りぬれてゆく黒土に烟草の
吸殻を投ぐ

墓はらを白足袋はきて行けるひと遠く小さく
なりにけるかも

萱草をかなしと見つる目にいまは雨にぬれて
行く兵隊が見ゆ

墓はらを歩み來にけり蛇の子を見むと來つれ
ど春あさみかも

病院をいでて墓原かげの土踏めば何(なに)になごみ
來しあが心ぞも

松風の吹きゐるところくれなゐの提灯つけて
分け入りにけり

8 夏の夜空

墓原に來て夜空見つ目のきはみ澄み透りたる
この夜空かな

なやましき眞夏なれども天なれば夜空は悲し
うつくしく見ゆ

きやう人(じん)を守(も)りつつ住めば星のゐる夜ぞらも
久(ひさ)に見ずて經にけり

目をあげてきよき天(あま)の原(はら)見しかども遠(とほ)の珍(めづら)の
ここちこそすれ

ひさびさに夜空を見ればあはれなるかな星群
れてかがやきにけり

空見ればあまた星居りしかれども彌々とほくひかりつつ見ゆ

汗ながれてちまたの長路ゆくゆゑにかうべ垂れつつ行けるなりけり

ひさびさに星空を見て居りしかば己れ親しくなりてくるかも（七月作）

9 土屋文明へ

おのが身をあはれとおもひ山みづに涙落しし
君を偲ばむ

ものみなの饐ゆるがごとき空戀ひて鳴かねば
ならぬ蟬のこゑ聞ゆ

もの書かむと考へゐたれ耳ちかく蜩なけば
あはれに聞ゆ

夕さればむらがりて來る油むし汗あえにつつ
殺すなりけり

かかる時菴羅の木の實くひたらば心落居むと
おもふ寂しさ

むらさきの桔梗のつぼみ割りたれば蕋現れて
にくからなくに

秋ぐさの花さきにけり幾朝をみづ遣りしかと
おもほゆるかも

ひむがしのみやこの市路をひとつのみ朝草車
行けるさびしさ（七月作）

167

10 狂人守

うけもちの狂人(きやうじん)も幾たりか死にゆきて折(をり)をり
あはれを感ずるかな

かすかにてあはれなる世(よ)の相(すがた)ありこれの相(すがた)に
親しみにけり

くれなゐの百日紅は咲きぬれど此きやうじん
はもの云はずけり

としわかき狂人守りのかなしみは通草の花の
散らふかなしみ

氣のふれし支那のをみなに寄り添ひて花は紅
しと云ひにけるかな

このゆふべ腦病院の二階より墓地見れば花も
見えにけるかな

ゆふされば青くたまりし墓みづに食血餓鬼は
鳴きかゐるらむ

あはれなる百日紅の下かげに人力車ひとつ見
えにけるかな（九月作）

11 海邊にて

眞夏の日てりかがよへり渚(なぎさ)にはくれなゐの玉
ぬれてゐるかな

海の香は山ふかき國に生(うま)れたる我のこころに
染まんとすらん

七夜寝て珠ゐる海の香をかげば哀れなるかも
この香いとほし

白なみの寄するなぎさに林檎食む異國をみな
はやや老いにけり

あぶらなす眞夏のうみに落つる日の八尺の紅
のゆらゆらに見ゆ

きこゆるは悲しきさざれうち浸(ひた)す潮波(うしほなみ)とどろ
湧きたるならむ

岩かげに海ぐさふみて玉ひろふくれなゐの玉
むらさき斑(ふ)のたま

百鳥(もゝとり)はいまだは啼かねわたつみは黒光りして
明けたるらむか

いささかの潮(しほ)のたまりに赤きもの生きて居たれば嬉しむかな

海の香はこよなく悲し珠ひろふわれのこころに染みにけるかも

櫻實(さくらご)の落ちてありやと見るまでに赤き珠ゐる岩かげを來し

ながれ寄る沖つ藻見ればみちのくの春野小草(はるのをぐさ)
に似てを悲しも

荒磯(ありそ)べに歎くともなき蟹の子の常(とこ)くれなゐに
見ゆらむあはれ

かすかなる命(いのち)をもちて海つもの美(うつく)しくゐる荒(あり)
磯(そ)べに來し

海のべを紅毛(こうまう)の子の走れるを心しづかに我は
見て居り
くれなゐの三角の帆がゆふ海に遠ざかりゆく
ゆらぎ見えずも
月ほそく入りなむとする海(うみ)の上(うへ)ほの暗くして
舟なかりけり

ぬば玉のさ夜ふけにして波(なみ)の穗(ほ)の青く光れば
戀(こひ)しきものを

けふもまた岩かげに來つ靡(なび)き藻(も)に虎斑(とらふ)魚の子
かくろへる見ゆ

しほ鳴(なり)のゆくへ悲しと海のべに幾夜か寢つる
この海のべに（九月作）

12 郊外の半日

今しがた赤くなりて女中を叱りしが郊外に來て寒けをおぼゆ

郊外はちらりほらりと人行きてわが息づきは和むとすらん

郊外に未（いま）だ落ちゐぬこころもて螇蚸（はつた）にぎれば
冷（つめ）たきものを

秋のかぜ吹きてゐたれば遠（をち）かたの薄（すすき）のなかに
曼珠沙華赤し

ふた本の松立てりけり下かげに曼珠沙華赤し
秋かぜが吹き

いちめんの唐辛子畑に秋のかぜ天より吹きて
鴉おりたつ

いちめんに唐辛子あかき畑みちに立てる童の
まなこ小さし

曼珠沙華咲けるところゆ相むれて現身に似ぬ
四人は出づ

草の實はこぼれんとして居たりけりわが足元（あしもと）の日の光かも

赭土（はに）はこぶ囚人（しうじん）の眼（め）の光るころ茜さす日は傾きにけり

トロッコを押す一人（いちにん）の囚人はくちびる赤し我（われ）をば見たり

片方に松二もとは立てりしが因はれ人は其處を通りぬ

秋づきて小さく結りし茄子の果を籠に盛る家の日向に蠅居り

女のわらは入日のなかに兩手もて籠に盛る茄子のか黑きひかり

天傳ふ日は傾きてかくろへば栗煮る家にわれいそぐなり

いとまなきわれ郊外にゆふぐれて栗飯食せば悲しこよなし

コスモスの闇にゆらげばわが少女天の戸に殘る光を見つつ　（十月作）

13 葬り火

黄涙餘錄の一

あらはなる棺(ひつぎ)はひとつかつがれて穩田(をんでん)ばしを
今わたりたり

自殺せし狂者(きやうしや)の棺(くわん)のうしろより眩暈(めまひ)して行け
り道に入日(いりひ)あかく

陸橋にさしかかるとき兵來れば棺はしまし地
に置かれぬ

まなこよりわれの涙は漲るとも人に知らゆな
悲しきゆゑに

ひとねむるさ夜中にしてあな悲し狂人の自殺
果てにけるはや

死なねばならぬ命まもりて看護婦はしろき火
かかぐ狂院のよるに

自らのいのち死なんと直いそぐ狂人を守りて
寝ねざるものを

土のうへに赤棟蛇遊ばずなりにけり入る日あ
かあかと草はらに見ゆ

歩兵隊代々木(よよぎ)のはらに群れゐしが狂人(きやうじん)のひつぎひとつ行くなり

赤光(しやくくわう)のなかに浮びて棺(くわん)ひとつ行き遙(はる)けかり野は涯(はて)ならん

187 わが足より汗いでてやや痛みあり靴にたまりし土ほこりかも

火葬場に細みづ白くにごり來も向うにひとが米を磨ぎたれば

死はも死はも悲しきものならざらむ日のもとに木の實落つたはやすきかも

兩手をばズボンの隱しに入れ居たりおのが身を愛しと思はねどさびし

葬り火は赤々と立ち燃ゆらんか我がかたはら
に男居りけり

うそ寒きゆふべなるかも葬り火を守るをとこ
が欠伸をしたり

骨瓶のひとつを持ちて價を問へりわが口は乾
くゆふさり來り

納骨の箱は杉の箱にして骨がめは黒くならびたりけり

上野なる動物園にかささぎは肉食ひゐたりくれなゐの肉を

おのが身しいとほしきかなゆふぐれて眼鏡のほこり拭ふなりけり

14 冬來

黄涙餘録の二

自殺せる狂者をあかき火に葬りにんげんの世に戰(をのの)きにけり

けだものは食(たべ)ものの戀ひて啼き居たり何(なに)といふやさしさぞこれは

ベリカンの嘴うすら赤くしてねむりけりかた
はらの水光かも

ひたいそぎ動物園にわれは來たり人のいのち
をおそれて來たり

わが目より涙ながれて居たりけり鶴のあたま
は悲しきものを

けだもののにほひをかげば悲しくもいのちは明く息づきにけり

支那國のほそき少女の行きなづみ思ひそめしわれならなくに

さけび啼くけだものの邊に潛みゐて赤き葬りの火こそ思へれ

鰐の子も居たりけりみづからの命死なんとせずこの鰐の子は

くれなゐの鶴のあたまに見入りつつ狂人守をかなしみにけり

はしきやし曉星學校の少年の頰は赤羅ひきて冬さりにけり

泥いろの山椒魚は生きんとし見つつしをれば
しづかなるかも

除隊兵寫眞をもちて電車に乗りひんがしの空
明けて寒しも

はるかなる南のみづに生れたる鳥ここにゐて
なに欲しみ啼く

15 柿乃村人へ

黄涙餘録の三

この夜ごろ眠られなくに心すら細らんとして
告げやらましを

たのまれし狂者はつひに自殺せりわれ現なく
走りけるかも

友のかほ青ざめてわれにもの云はず今は如何
なる世の相かや

おのが身はいとほしければ赤棟蛇も潜みたる
なり土の中ふかく

世の色相のかたはらにゐて狂者もり悲しき涙
湧きいでにけり

やはらかに弱きいのちもくろぐろと甲(よろ)はんと
してうつつともなし

寒ぞらに星ゐたりけりうらがなしわが狂院を
ここに立ち見つ

かの岡に瘋癲院のたちたるは邪宗來(じやしゆうらい)より悲し
かるらむ

みやこにも冬さりにけり茜さす日向のなかに
髭剃りて居る

遠國へ行かば剃刀のひかりさへ馴れて親しと
いへば歎かゆ（十一月作）

16 ひとりの道

霜ふればほろほろと胡麻の黒き實の地につく
なし今わかれなむ
夕凝りし露霜ふみて火を戀ひむ一人のゆゑに
こころ安けし

ながらふるさ霧のなかに秋花を我摘まんとす
人に知らゆな

白雲は湧きたつらむか我ひとり行かむと思ふ
山のはざまに

神無月空の際涯よりきたるとき眼ひらく花は
あはれなるかも

ひとりなれば心安けし谿ゆきて黒き木の實も
食ふべかりけり

ひかりつつ天を流るる星あれど悲しきかもよ
われに向はず

おのづからうら枯るる野に鳥落ちて啼かざり
しかも入日赤きに

いのち死にてかくろひ果つるけだものを悲し
みにつつ峡(かひ)に入りつつも

みなし兒の心のごとし立ちのぼる白雲の中に
行かむとおもふ

もみぢ斑(ふ)に照りとほりたる日の光りはざまに
われを動かざらしむ

203

わが歩みここに極まり雲くだるもみぢ斑のな
かに水のみにけり

はるけくも山がひに來て白樺に觸（さは）りて居たり
冷たきその幹

ひさかたの天のつゆじもしとしとと獨り歩ま
む道ほそりたり　（十一月作）

17 青山の鐵砲山

赤き旗けふはのぼらずどんたくの鐵砲山に小供らが見ゆ

日だまりの中に同様のうなゐらは皆走りつつ居たりけるかも

銃丸を土より掘りてよろこべるわらべの側を
行き過ぎりけり

青竹を手に振りながら童子來て何か落ちゐぬ
面持をせり

ゆふ日とほく金にひかれば群童は眼つむりて
斜面をころがりにけり

群童が皆ころがれば丘のへの童女かなしく笑ひけるかも

いちにんの童子ころがり極まりて空見たるかな太陽が紅し

射的場に細みづ湧きて流れければ童ふたりが水のべに來し

（十月作）

18 折に觸れて

くろぐろと圓らに熟るる豆柿に小鳥はゆきぬ
つゆじもはふり

藏王山に雪かも降るといひしときはや斑なり
といらへけらずや

狂者らは Paederastie をなせりけり夜しんしんと更けがたきかも

ゴオガンの自畫像みればみちのくに山蠶殺ししその日おもほゆ

をりをりは腦解剖書讀むことありゆゑ知らに心つつましくなり

水のうへにしらじらと雪ふりきたり降りきたりつつ消えにけるかも

身ぬちに重大（ぢゆうだい）を感ぜざれども宿直（とのゐ）のよるにうなじ垂れゐし

この里（さと）に大山（おほやま）大將住むゆゑにわれの心の嬉しかりけり　（十二月作）

19 雪ふる日

かりそめに病みつつ居ればうらがなし墓はら
とほく雪つもる見ゆ

現身（うつしみ）のわが血脈（けちみやく）のやや細り墓地（はち）にしんしんと
雪つもる見ゆ

あま霧らし雪ふる見れば飯をくふ囚人のこころ
われに湧きたり

わが庭に鶩ら啼きてゐたれども雪こそつもれ
庭もほどろに

ひさかたの天の白雪ふりきたり幾とき經ねば
つもりけるかも

枇杷の木の木ぬれに雪のふりつもる心愛憐み
しまらくも見し

さにはべの百日紅のほそり木に雪のうれひの
しらじらと降る

天つ雪はだらに降れどさにづらふ心にあらぬ
心にはあらぬ　（十二月作）

20　宮益坂

向うにも女は居たり青き甕もち童子になにかいひつけしかも

馬に乗りて陸軍將校きたるなり女難の相か然にあらじか　（十二月作）

大正二年

1 さんげの心

雪のなかに日の落つる見ゆほのぼのと懺悔の
心かなしかれども

こよひはや學問したき心起りたりしかすがに
われは床にねむりぬ

風(かぜ)ひきて寢(ね)てゐたりけり窓(まど)の戸(と)に雪ふる聞ゆ
さらさらといひて

あわ雪は消(け)なば消(け)ぬがに降りたれば眼(まなこ)悲(かな)しく
消(け)ぬらくを見(み)む

腹ばひになりて朱(しゆ)の墨(すみ)すりしころ七面鳥に泡(あわ)
雪(ゆき)は降りし

ひる日中（ひなか）床（とこ）の中（なか）より目をひらき何か見つめん
と思ほえにけり

雪のうへ照る日光（につくわう）のかなしみに我がつく息（いき）は
ながかりしかも

赤電車（あかでんしや）にまなこ閉（と）づれば遠國（をんごく）へ流れて去（い）なむ
こゝろ湧きたり

家ゆりてとどろと雪はなだれたり今宵は最早
幾時ならむ

しんしんと雪ふる最上の上の山に弟は無常を
感じたるなり

ひさかたの光に濡れて縦しゑやし弟は無常を
感じたるなり

電燈の球にたまりしほこり見ゆすなはち雪は
なだれ果てたり

天霧らし雪ふりてなんぢが妻は細りつつ息を
つかむとすらし

あまつ日に屋上の雪かがやけりしづごころな
きいまのたまゆら

しろがねのかがよふ雪に見入りつつ何を求め
むとする心ぞも

いまわれはひとり言いひたれども哀れあはれ
かかはりはなし

ゆふぐれて心せはしく街ゆけば街には女おほ
くゆくなり

（一月作）

2 根岸の里

にんげんの赤子を負へる子守居りこの子守はも笑はざりけり

日あたれば根岸の里の川べりの青蕗のたう搖りたつらむか

くれたけの根岸里べの春淺み屋上の雪凝りて
かがよふ

角兵衛のをさな童のをさなさに足をとどめて
我は見んとす

笛の音のとろりほろろと鳴りひびき紅色の獅
子あらはれにけり

いとけなき額のうへにくれなゐの獅子の頭を
持つあはれさよ

春のかぜ吹きたるならむ目のもとの光のなか
に塵うごく見ゆ

ながらふる日光のなか一いろに我のいのちの
めぐるなりけり　（一月作）

3 きさらぎの日

狂院を早くまかりてひさびさに街をあゆめば
ひかり目に染む

平凡に涙をおとす耶蘇兵士あかきじやけつを
着つつ來にけり

きさらぎの天つひかりに飛行船ニコライ寺の
うへを走れり

杵あまた並べばかなし一様につぼの白米に落
ちにけるかも

もろともに天を見上げし耶蘇士官あかきじや
けつを着たりけるかも

まぼしげに空に見(み)入(い)りし女(をんな)あり黄色(くわうしよく)のふね天(あま)
馳(は)せゆけば

二(に)月(ぐわつ)ぞらに黄(き)いろの船の飛べるときしみじみ
として女(をみな)をぞおもふ

この身はも何か知らねどいとほしく夜(よる)おそく
ゐて爪きりにけり　（二月作）

4 神田の火事

これやこの昨日の夜の火に赤かりし跡どころ
なれや烟立ち見ゆ
天明けし焼跡どころ燃えかへる火中に音の聞
えけるかも

亡ぶるものは悲しけれども目の前にかかれと
てしも赤き火にほろぶ

たちのぼる灰燼のなかに黑眼鏡しろき眼鏡を
賣るぞ寂しき

あきうどは眼鏡よろしと言あげてみづからの
目に眼鏡かけたり

（三月作）

5 口ぶえ

このやうに何に顴骨たかきかや觸りて見れば
をみななれども

この夜をわれと寢る子のいやしさのゆゑ知ら
ねども何か悲しき

目をあけてしぬのめごろと思ほえばのびのび
と足をのばすなりけり

ひんがしはあけぼのならむほそほそと口笛ふ
きて行く童子(どうじ)あり

あかねさす朝明(あさあけ)ゆゑにひなげしを積みし車に
會ひたるならむ

(五月作)

6 おひろ 其の一

なげかへばものみな暗しひんがしに出づる星
さへあかからなくに

とほくとほく行きたるならむ電燈を消せばぬ
ばたまの夜も更けぬる

夜(よる)くれば小(さ)夜(よ)床(どこ)に寝しかなしかる面(おも)わも今は
無しも小(を)床(どこ)も

かなしみてたどきも知らず淺草の丹(に)塗(ぬり)の堂に
われは來にけり

あな悲し觀音(くわんのん)堂(だう)に癩(らい)者(しや)ゐてただひたすらに錢(ぜに)
欲りにけり

淺草に來てうで卵買ひにけりひたさびしくて
わが歸るなる

はつはつに觸れし子ゆゑにわが心今は斑らに
嘆きたるなれ

代々木野をひた走りたりさびしさに生の命の
このさびしさに

さびしさびしいま西方にゆらゆらと紅く入る
日もこよなく寂し

紙屑を狹庭に焚けばけむり立つ戀しきひとは
遙かなるかも

ほろほろとのぼるけむりの天にのぼり消え果
つるかに我も消ぬかに

ひさかたの悲天のもとに泣きながらひと戀ひ
にけりいのちも細く

放り投げし風呂敷包ひろひ持ち抱きてゐたり
さびしくてならぬ

ひつたりといだきて悲しひとならぬ瘋癲學の
書のかなしも

うづ高く積みし書物に塵たまり見の悲しもよ
たどき知らねば

つとめなればけふも電車に乘りにけり悲しき
ひとは遙かなるかも

この朝け山椒の香のかよひ來てなげくこころ
に染みとほるなれ

其の二

ほのぼのと目を細くして抱かれし子は去りし
より幾夜か經たる
愁ひつつ去にし子ゆゑに藤のはな搖る光さへ
悲しきものを

しらたまの憂のをみな我に來り流るるがごと
今は去りにし

かなしみの戀にひたりてゐたるとき白藤の花
咲き垂りにけり

夕やみに風たちぬればほのぼのと躑躅の花は
散りにけるかも

おもひ出は霜ふる谿に流れたるうす雲の如く
かなしきかなや

あさぼらけひとめ見しゆゑしばだたくくろき
まつげをあはれみにけり

しんしんと雪ふりし夜にその指（ゆび）のあな冷（つめ）たよ
と言ひて寄りしか

狂院の煉瓦のうへに朝日子のあかきを見つゝ
なげきけるかな

わが生(あ)れし星を慕ひしくちびるの紅(あか)きをみな
をあはれみにけり

わが命(いのち)つひに光りて觸りしかば否(いな)といひつつ
消ぬがにも寄る

彼のいのち死去ねと云はばなぐさめ我の心
は云ひがてぬかも

すり下す山葵おろしゆ滲みいでて垂る青みづ
のかなしかりけり

243

啼くこゑは悲しけれども夕鳥は木に眠るなり
われは寝なくに

其の三

愁へつつ去にし子ゆゑに遠山にもゆる火ほど
の我がこころかな

あはれなる女の瞼戀ひ撫でてその夜ほとほと
われは死にけり

このこころ葬らんとして來りつる畑に麥は赤らみにけり

夏されば農園に來て心ぐし水すましをばつかまへにけり

藻のなかに潜むゐもりの赤き腹はつか見そめてうつつともなし

麥の穗に光のながれたゆたひて向うに山羊は啼きそめにけり

この心葬り果てんと秀の光る錐を疊に刺しにけるかも

わらじ蟲たたみの上に出で來しに烟草のけむりかけて我居り

念々にをんなを思ふわれなれど今夜もおそく
朱の墨するも

この雨はさみだれならむ昨日よりわがさ庭べ
に降りてゐるかも

つつましく一人し居れば狂院のあかき煉瓦に
雨のふる見ゆ

瑠璃いろにこもりて圓き草の實は悲しき人のまなこなりけり

ひんがしに星いづる時汝が見なばその目ほのぼのとかなしくあれよ

（五月六月作）

7　死にたまふ母　其の一

ひろき葉は樹にひるがへり光りつつかくろひ
につつしづ心なけれ

白ふぢの垂花ちればしみじみと今はその實の
見えそめしかも

みちのくの母のいのちを一目(ひとめ)見ん一目みんとぞただにいそげる

うちひさす都(みやこ)の夜(よる)にともる灯(ひ)のあかきを見つつこころ落ちゐず

ははが目を一目(ひとめ)を見んと急ぎたるわが額(ぬか)のへに汗いでにけり

灯(ともし)あかき都をいでてゆく姿(すがた)かりそめの旅と人
見るらんか

たまゆらに眠(ねむ)りしかなや走りたる汽車ぬちに
して眠りしかなや

吾(あ)妻(つま)やまに雪かがやけばみちのくの我が母の
國に汽車入りにけり

朝さむみ桑の木の葉に霜ふりて母にちかづく
汽車走るなり

沼の上にかぎろふ青き光よりわれの愁の來む
と云ふかや

白龍湖

上の山の停車場に下り若くしていまは鰥夫の
おとうとを見たり

其の二

はるばると薬(くすり)をもて來(こ)しわれを目守(まも)りたまへりわれは子(こ)なれば

寄り添へる吾を目守(まも)りて言ひたまふ何かいひたまふわれは子なれば

長押なる丹ぬりの槍に塵は見ゆ母の邊の我が
朝目には見ゆ

山いづる太陽光を拜みたりをだまきの花咲き
つづきたり

死に近き母に添寢のしんしんと遠田のかはづ
天に聞ゆる

桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ
母呼びにけり

死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたり
といひにけるかな

春なればひかり流れてうらがなし今は野のべ
に蟆子も生れしか

死に近き母が額(ひたひ)を撫(さす)りつつ涙ながれて居たりけるかな

母が目をしまし離(か)れ來て目守(まも)りたりあな悲しもよ蠶(かふこ)のねむり

我(わ)が母よ死にたまひゆく我(わ)が母よ我(わ)を生(う)まし乳足(ちた)らひし母よ

のど赤き玄鳥(つばくらめ)ふたつ屋梁(はり)にゐて足乳根(たらちね)の母は死にたまふなり

いのちある人あつまりて我が母のいのち死(し)に行(ゆ)くを見たり死ゆくを

ひとり来て蚕(かふこ)のへやに立ちたれば我(わ)が寂しさは極まりにけり

其の三

楢若葉てりひるがへるうつつなに山蠶は青く
生れぬ山蠶は

日のひかり斑らに漏りてうら悲し山蠶は未だ
小さかりけり

葬り道すかんぽの華ほほけつつ葬り道べに散りにけらずや

おきな草口あかく咲く野の道に光ながれて我ら行きつも

わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母
は燃えゆきにけり

さ夜ふかく母を葬(はふ)りの火を見ればただ赤くも
ぞ燃えにけるかも

はふり火を守(まも)りこよひは更けにけり今(こ)夜(よひ)の天(てん)
のいつくしきかも

火を守(も)りてさ夜ふけぬれば弟は現身(うつしみ)のうたかなしく歌ふ

ひた心目(ま)守(も)らんものかほの赤くのぼるけむりのその煙(けむり)はや

灰のなかに母をひろへり朝日子(あさひこ)ののぼるがなかに母をひろへり

蕗の葉に丁寧にあつめし骨くづもみな骨瓶(こつがめ)に
入れしまひけり

うらうらと天(てん)に雲雀は啼きのぼり雪斑(はだ)らなる
山に雲ゐず

どくだみも薊(あざみ)の花も燒けゐたり人葬所(ひとはふりど)の天(あめ)明(あ)
けぬれば

其の四

かぎろひの春なりければ木の芽みな吹き出づ
る山べ行きゆくわれよ
ほのかなる通草(あけび)の花の散るやまに啼く山鳩の
こゑの寂しさ

山かげに雉子が啼きたり山かげに湧きづる湯こそかなしかりけれ

酸(すゆ)き湯に身はかなしくも浸(ひた)りゐて空にかがやく光を見たり

ふるさとのわぎへの里にかへり來て白ふぢの花ひでて食ひけり

日かげに消のこる雪のかなしさに笹かき分け
て急ぐなりけり

笹原をただかき分けて行き行けど母を尋ねん
われならなくに

火のやまの麓にいづる酸の湯に一夜ひたりて
かなしみにけり

ほのかなる花の散りにし山のべを霞ながれて
行きにけるかも

はるけくも峡(はざま)のやまに燃ゆる火のくれなゐと
我(あ)が母と悲しき

山腹にとほく燃ゆる火あかあかと煙はうごく
かなしかれども

たらの芽を摘みつつ行けり山かげの道ほそり
つつ寂しく行けり

寂しさに堪へて分け入る山かげに黒々(くろぐろ)と通草(あけび)
の花ちりにけり

見はるかす山腹なだり咲きてゐる辛夷(こぶし)の花は
ほのかなるかも

藏王山に斑ら雪かもかがやくと夕さりくれば
岫ゆきにけり

しみじみと雨降りゐたり山のべの土赤くして
あはれなるかも

遠天を流らふ雲にたまきはる命は無しと云へ
ばかなしき

やま峡（かひ）に日はとつぷりと暮れゆきて今は湯の
香（か）の深くただよふ

湯どころに二夜（ふたよ）ねむりて蓴菜（じゆんさい）を食へばさらさ
らに悲しみにけり

山ゆゑに笹竹の子を食ひにけりははそはの母
よははそはの母よ

（五月作）

8 みなづき嵐

どんよりと空は曇りて居りしとき二たび空を
見ざりけるかも

わが體(たい)にうつうつと汗にじみゐて今みなの
嵐ふきたつ

わがいのち芝居（しばゐ）に似ると云はれたり云ひたる
をとこ肥りゐるかも

みなづきの嵐のなかに顫（ふる）ひつつ散るぬば玉の
黒き花みゆ

狂院（きやうゐん）の煉瓦の角（かど）を見ゐしかばみなづきの嵐ふ
きゆきにけり

狂じや一人(ひとり)蚊帳よりいでてまぼしげに覆盆子(いちご)
食べたしといひにけらずや

ながながと廊下を來つついそがしき心沸きた
りわれの心に

蚊帳のなかに蚊が二(に)三(さん)疋(びき)ゐるらしき此寂しさ
を告げやらましを

ひもじさに百日を經たりこの心よるの女人を
見るよりも悲し

日を吸ひてくろぐろと咲くダアリヤはわが日
のもとに散らざりしかも

かなしさは日光のもとダアリヤの紅色ふかく
くろぐろと咲く

うつうつと濕り重(おも)たくひさかたの天(あめ)低くして
動かざるかも

たたなはる曇りの下を狂人はわらひて行けり
吾を離れて

ダアリヤは黑し笑ひて去りゆける狂人は終(つひ)に
かへり見ずけり

（六月作）

9　麥奴

病監の窓のしたびに紫陽花が咲き折をり風は
吹き行きにけり

いそぎ來て汗ふきにけり監獄のあかき煉瓦に
降れるさみだれ

飯(いひ)かしぐ煙(けむり)ならむと鉛筆の秀(ほ)を研きながらひとりおもへり

監房より今しがた來し囚人(しうじん)はわがまへにゐてすこし笑(ゑ)みつも

光もて囚人の瞳(ひとみ)てらしたりこの囚人を觀(み)ざるべからず

紺いろの囚人の群（むれ）笠かむり草刈るゆゑに光るその鎌

監獄に通ひ來しより幾日經し蜩（かなかな）啼きたり二つ啼きたり

まはりみち畑にのぼればくろぐろと麥奴（むぎのくろみ）は棄てられにけり

（七月作）

10 七月二十三日

めん雛(どり)ら砂あび居(ゐ)たれひつそりと剃刀(かみそり)研人(とぎ)は
過ぎ行きにけり

夏休日(なつやすみ)われもももらひて十日(とをか)まり汗をながして
なまけてゐたり

たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙花紅く
散りゐたりけり

十日なまけけふ來て見れば受持の狂人ひとり
死に行きて居し

鳳仙花かたまりて散るひるさがりつくづくと
われ歸りけるかも　（七月作）

11 屋上の石

あしびきの山の峽(はざま)をゆくみづのをりをり白く
たぎちけるかも

しら玉の憂(うれひ)のをんな戀ひたづね幾やま越えて
來りけむかも

鳳仙花城あとに散り散りたまる夕かたまけて
忍び來にけり

天そそるやまのまほらに夕よどむ光を見つつ
あひ歎きつも

屋上の石は冷めたしみすずかる信濃のくにに
我は來にけり

屋根の上に尻尾動かす鳥來りしばらく居つつ
飛びにけるかも

屋根踏みて居ればかなしもすぐ下(した)の店(みせ)に卵を
數へゐる見ゆ

屋根にゐて微(かそ)けき憂(うれひ)湧きにけり目(ま)したの街(まち)の
なりはひの見ゆ　（七月作）

12 悲報來

七月三十日夜、信濃國上諏訪に居りて、伊藤左千夫先生逝去の悲報に接す。すなはち予は高木村なる島木赤彦宅へ走る。時すでに夜半を過ぎゐたり。

ひた走るわが道暗ししんしんと怺（こら）へかねたるわが道くらし

すべなきか螢(ほたる)をころす手のひらに光つぶれて
せんすべはなし

ほのぼのとおのれ光りてながれたる螢(ほたる)を殺す
わが道くらし

氷室(ひむろ)より氷(こほり)をいだし居る人はわが走る時ものを
を云はざりしかも

氷きるをとこの口のたばこの火赤かりければ
見て走りたり

死にせれば人は居ぬかなと歎かひて眠り薬を
のみて寝んとす

赤彦と赤彦が妻吾に寝よと蚤とり粉を呉れに
けらずや

罌粟はたの向うに湖の光りたる信濃のくにに
目ざめけるかも

諏訪のうみに遠白く立つ流波つばらつばらに
見んと思へや

おかあかと朝焼けにけりひんがしの山並の空
朝焼けにけり

（七月作）

13 先師墓前

ひつそりと心なやみて水かくる松葉ぼたんは
きのふ植ゑにし

しらじらと水のなかよりふふみたる水ぐさの
花小さかりけり　（八月作）

赤光

をはり

「赤光」初版跋

○明治三十八年より大正二年に至る足かけ九年間の作八百三十三首を以て此一卷を編んだ。たまたま伊藤左千夫先生から初めて敎をうけた頃より先生に死なれた時までの作になつてゐる。アララギ叢書第二編が予の歌集の割當に當つた時、予は先づ此一卷を左千夫先生の前に捧呈しようと思つた。而して、今から見ると全然棄てなければならぬ樣なひどい作迄も輯錄して往年の記念にしようとした。特に近ごろの予の作が先生から襃められるやうな事は殆ど無かつたゆゑに、大正二年二月以降の作は雜誌に發表せずに此歌集に收めてから是非先生の批評をあふがうと思つて居た。ところが七月卅日の、この歌集編輯がやうやく大正二年度が終つたばかりの時に、突如として先生に死なれて仕舞つた。そ

れ以來氣が落つかず、清書するさへものうくなつて、後半の順序の統一しないのもその儘におくやうになつたのは其爲めである。はじめの心と今の心と何といふ相違であらう。それでもどうにか歌集は出來上がつた。悲しく予は此一卷を先生の靈前にささげねばならぬ。

○平福百穗、木下杢太郎の二氏が特に本書のために繪を賜はつた事を予は光榮に思つてゐる。そのうち木下杢太郎氏の佛頭圖は明治四十三年十月三田文學に出た時分から密かに心に思つて居たものである。このたび予の心願かなつて到々予のものになつたのである。また、本書發行に就いて予を勵まし便利を與へられた長塚節、島木赤彦、中村憲吉、蕨桐軒、古泉千樫の諸氏並びに信濃諸同人に對し、又「とうとうと喇叭を吹けば」の句を呉れた清水謙一郎氏に對し感謝の念をささげねばならぬ。

○文法の誤の數ヶ所あること。送假名法の一定せざること　漢字使用法の曖昧な

ること等は、億劫な爲めにその儘にして置いた。本書の作物は今ごろ發行して讀んでもらふのには、工合の惡いのが多い。併し同じく讀んでもらふうへは自分に比較的親しいのを讀んでもらはうと思つて、新しい方を先にした。はじめの方を一寸讀んで頂くといふ心持である。本書は予のはじめての歌集である。世の先輩諸氏からいろいろ教へて頂いてもつと勉強したい。

○本書の「赤光」といふ名は佛說阿彌陀經から採つたのである。彼の經典には「池中蓮華大如車輪青色青光黃色黃光赤色赤光白色白光微妙香潔」といふところがある。予が未だ童子の時分に遊び仲間に雛法師が居て切りに御經を諳誦して居た。梅の實をひろふにも水を浴びるにも「しやくしき、しやくくわう、びやくくしき、びやくくわう」と誦して居た。「しやくくわう」とは「赤い光」の事であると知つたのは東京に來て、新刻訓點淨土三部妙典といふ赤い表紙の本を買つた時分であつて、あだかも露伴の「日輪すでに赤し」の句を發見して嬉しく思つ

たころであつた。それから繰つて見ると明治三十八年は予の廿四歳のときである。大正二年九月二十四日よるしるす。

「赤光」再版に際して

○多忙の身の上の故に「赤光」の歌も初版校正出來しみじみと繰讀せずに經た。「赤光」の初版發行は大正二年十月である。いま初版が賣切れて再版發行の運に到つたと聞くと、何となく嬉しい心が湧く、「赤光」の歌は私の敬愛する先輩諸氏からも遠國土に住むまだ知らない人々からも愛されて、さうして私は少し有名になつた。

○おもふに短歌のやうな體の抒情詩を大つぴらにするといふことは、切腹面相を見 る うなものであるかも知れない。むかしの侍は切腹して臓腑も見せて

ゐろ。さうして西人は此こころを besondere Ehrgeiz などいふ語の内容に關聯せしめてもの言つてゐたが、「赤光」發行當時の私のこころは、少し色合が違つてゐた。大正元年九月の歌

銀　錢　光

とりいだす紙つゝみよりあらはるゝ銀貨のひかりかなしかりけれ

電燈をひくゝおろしてしろがねの錢かぞふればこほろぎが啼く

さ夜ふけと夜はふけぬらし銀(ぎん)の錢(ぜに)かぞふればその音(ね)ひゞきたるかな

わがまなこ當面(まとも)に見たり疊をばころがり行きし銀錢(ぎんせん)のひかり

しみじみと紙幣の面(めん)をながめたりわきて氣味わるきものにはあらず

などがある。當時雜誌アララギの會計係であつた私は、常にアララギの發行を氣にしてゐた。その後アララギはだんだん發行を續けて倒れずにゐる。私の微かな歌集赤光がアララギとどういふ關係に立ちそれが如何に續いて來たかを念ふ

ときいろいろの追憶が湧いてくる。

○白面の友がきて、「赤光」は大正初年以後の短歌界に小さいながら一期を劃すやうに働掛けたと言放つ。私はその詞にあつてゐて苦笑もしない。ある夜、現歌壇の一部の Schematismus に對して「赤光」がいかに働掛けたかを思つたときいたく眉間を蹙めた。けれどもかかることは私の關するところではない。「赤光」は過去時に於ける私の悲しい命の捨どころであつた。

○歌つくりを現世出世の道とおもふな。そしてなほ歌をつくつてゐる　西國觀世音の札所を巡つて來た故里の老いたる父は「茂吉は歌などつくるさうだな」と云つた。それから田植が忙しいからと云つて歸國した。いまは故里に梅の實黃に落ち、蠶は繭になり、その繭は絹糸になつて、藏王山の雪はだらに、それが消え、通草の實いよいよふくれて、大自然といへども刻々に變化してやむ時がない。「赤光」の再版に際して心に浮んだ斷片を書きつけ置く。大正四年七月一日

夜青山にて茂吉しるす。

「赤光」三版に際して

「赤光」が賣切れて第三版を發行するといふことを東雲堂主人が通知して來た。私は嬉しいと思つた。そこで久々で「赤光」の歌を讀んでみた。いかにも不滿な歌が多いので今更かなしんでゐる。かつてはいゝつもりで居つたのであつて、それが今は駄目である。私は自分で少しづゝ直したいと思つたけれども、その暇がない、それゆゑに恥かしいけれども元の儘で第三版を發行し、私の歌を讀まれたかたがたに感謝して居る。大正七年四月廿三日。長崎にて齋藤茂吉記。

改選「赤光」跋

「赤光」の第五版が品切になつてからもう一年ぐらゐになるさうである。第三版を發行するとき、僕は長崎にゐて「赤光」の歌の不滿なのをところどころ象嵌して直さうとしたが、忙しいので果さなかつた。大正九年十月の丁度今ごろである。僕は「あらたま」の編輯を終へてからその原稿を東京へ送つて、西浦上村六枚板（ろくまいいた）といふところに轉地した。そこに五日間ばかりゐるうち、夜のひまひまに油煙のたつランプのもとで、「赤光」の歌の餘りひどいのを直し或は削つた。それも長い間その儘になつてゐたが、やうやく大正十年九月すゑになつて、大いそぎで淨書し、順序を換へて舊い歌の方を先きにし、「あらたま」と體裁を揃へることにして、いよいよ改選「赤光」を發行することになつた。「赤光」の歌は

既にいろいろの書物に引用せられたけれども、今後「赤光」の歌を論ぜられる場合には、改選「赤光」の方に據つてもらひたひと思ふ。しかし直した歌が皆氣に入つてゐるといふのではない。不滿の氣持は依然としてあるけれども、さう濫りには直すことをしない。僕の外遊の日は既に迫つた。僕は端的に改選「赤光」の前途を祝福する。大正十年十月十日。齋藤茂吉。東京青山にて。

改選「赤光」第三版跋

○大正十年十一月に「赤光」を改選して發行したが、大正十二年九月一日の大震災で紙型も何も燒けてしまつた。それから、發行書肆東雲堂は大地震以後方針を替へたので、「赤光」の成行もそのままになつてゐた。

○しかるに此の度、春陽堂の小峰八郎氏の骨折により、それから東雲堂主人西村陽吉氏の承諾を得て、改選「赤光」を春陽堂から發行することになつた。春陽堂發行のものには、先師の「左千夫全集」があり、長塚節のものがあり、僕のものも數種あるから、「赤光」もそこに纏めておくことは僕にもやはり氣持がいゝ。

○このたびの改選「赤光」は大正十年版のものと内容が同じであるが、大正十年版の誤植を二三改め、句を二つばかり變へた。それを念のためこゝに書くならば、

誤	正
炎口（ゑんく）	炎口（えんく）
亡者（まうじや）	亡者（まうじや）
恍け溶く（とけとく）	恍け溶く（ほけとく）

である。それから『人間は馬牛となり』は『人間は牛馬となり』であり『弟は現身のうた歌ふ悲しく』ならば『弟は現身の歌悲しくうたふ』とした。それくらゐに過ぎない。

○『赤光』の初版發行は大正二年で、もう一昔前である。初版發行當時にはいろいろ同情して頂いたので『赤光』は僕を有名にした歌集である。それゆゑ思出もなかなか深く、また同情して頂いた方々を忘却せざらむことを欲してゐる。

○初版當時、表紙や挿繪のことで西村陽吉氏をいろいろ煩はしたことを想起する。このたびもやはり表紙や挿繪のことで小峰八郎氏を隨分煩はした。實に果

敢ない事にのみ骨折るやうであるが、それは僕の性分であらうか。
○僕はおもひがけなく火事で不幸に陥つたけれども、みづからを謹んで、神明を怨むことをしない。そして一人心しづかに、この「赤光」の前途を祝福しようとおもふ。大正十四年六月廿二日　東京青山にて齋藤茂吉しるす。
○なほ。大正十年版の誤植中には、二〇頁第一首、『ゆらに咲きまく』は『ゆらに吹きまく』二七頁第二首『雲みそむ見ゆ』は『雲ひそむ見ゆ』の誤である。八四頁第二首『よろいねにけり』は『よろに寝ねたる』である。今度は誤植がないつもりであるから、これを以て「赤光」の定本としたい。校正には武藤善友君の助力をあふいだ。

大正二年十月十日印刷
大正二年十月十五日發行
大正四年七月一日再版
大正七年五月二十日三版
大正八年三月二十日四版
大正八年十一月七日五版
大正十年十一月一日改選發行
大正十四年八月十五日改選三版

著者檢印

歌集赤光
金貳圓六拾錢

著者　齋藤茂吉

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂
電話大手　一五一番　二四二一〇番
振替東京　一六一七番

圖書目錄進呈……往復葉書にて御申越次第……春陽堂

アララギ叢書目次

- 第一編　島木赤彦・中村憲吉合著　馬鈴薯の花　東雲堂發行　定價壹圓參拾錢
- 第二編　齋藤茂吉著　赤光（しやくくわう）　春陽堂發行　定價貳圓六拾錢
- 第三編　古泉千樫著　屋上の土　未刊
- 第四編　島木赤彦著　切火（きりび）　品切
- 第五編　齋藤茂吉著　短歌私鈔　春陽堂發行　品切
- 第五編　齋藤茂吉著　續短歌私鈔　春陽堂發行　品切
- 第六編　中村憲吉著　林泉集　春陽堂發行　定價貳圓貳拾錢
- 第七編　齋藤茂吉著　童馬漫語　春陽堂發行　定價貳圓八拾錢
- 第八編　島木赤彦著　氷魚（ひを）　岩波書店發行　定價貳圓五拾錢
- 第九編　長塚節著　長塚節歌集　春陽堂發行　定價貳圓七拾錢
- 第十編　齋藤茂吉著　あらたま　春陽堂發行　定價貳圓六拾錢

第十一編	伊藤左千夫著	左千夫全集	春陽堂發行	定價參圓五拾錢
第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	古今書院發行	定價各壹圓五拾錢
第十三編	土田耕平著	青杉	古今書院發行	定價壹圓八拾錢
第十四編	石原純著	靉日	アルス發行	定價貳圓八拾錢
第十五編	中村憲吉著	しがらみ	岩波書店發行	定價壹圓八拾錢
第十六編	島木赤彦著	歌道小見	岩波書店發行	定價壹圓五拾錢
第十七編	アララギ發行所編	大正十二年震災歌集 灰燼集	古今書院發行	定價壹圓八拾錢
第十八編	島木赤彦著	太虚集	古今書院發行	定價貳圓貳拾錢
第十九編	村上成之著	翠微	近刊	
第廿編	土屋文明著	ふゆくさ	古今書院發行	定價貳圓參拾錢
第廿一編	以下續刊			

古谷夏子
Natsuko Y. Furuya

EAST-ASIAN LIB. - U. OF T.
3 1761 05134503 1